

これでバッチリ釣れる！

へらエサ マニュアル 徹底解説

Vol.7

段差の

底釣り

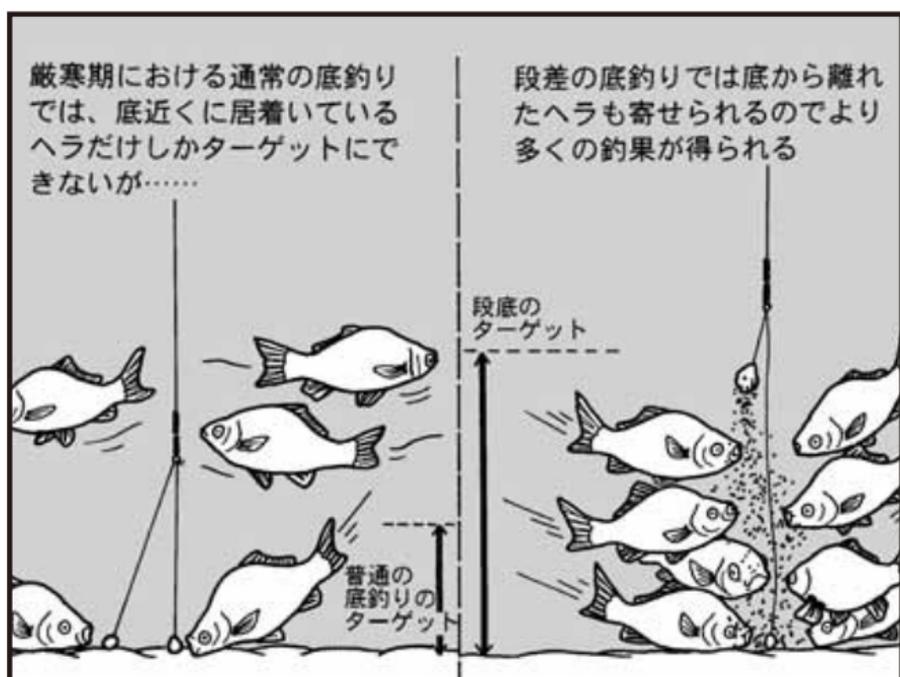


つれるエサづくり一筋
マルキュー

本社・桶川工場 埼玉県桶川市赤堀 2-4 〒363-8509
TEL : (048) 728-0909(代) FAX : (048) 728-3909
<http://www.marukyu.com/>

段差の底釣りとは...

略して「段底(ダンソコあるいは、ダンゾコ)」などとも呼ばれるが、その名の通りバラケとくわせの段差を大きく取る底釣りである。通常、上バリのバラケは底から離し、下バリのくわせのみ水底に着けるセッティングが一般的で、下バリトントンの状態をスタート時の基本とする。セットの深宙釣りで、下バリだけ底につけた状態と理解すれば分かりやすいだろうか。厳寒期においては、食い気のある新ペラ以外は普通の底釣り、いわゆるバランスの底釣りでは釣り切れない場面が多い。こんな時、バラケを広範囲に拡散させて、より多くのヘラブナを寄せられる段差の底釣りは、アタリが出るチャンスが増えると同時に、食いアタリが明確で釣りやすいなどのメリットがある。



Step.1

どんなセッティングが良いの？

サオ = 8 ~ 21尺

水深に見合った長さを選択。サオ先一杯にウキが来るよりも、ウキ一本残し程度が釣りやすい。

セッティングのツボ

段底仕掛けのキモはハリスの長さや段差に集約される。釣況よりもむしろ釣り場全体の傾向、いわゆる“クセ”で左右されることが多く、フィールド毎に実績のあるセッティングに従うのがベターだ。



ウキ = 細めのパイプトップの底釣りタイプでボディ寸法5.5mm径10 ~ 16cm程度を水深によって使い分ける。

ウキの位置は、サオ先からウキ二本分の所。少し遊びがある方が釣りやすい

ミチイト = 0.6 ~ 0.8号

季節風などにより流れが生じた場合、また極端な食い渋りの場合を想定し、出来るだけ細いものが好ましい。

ハリス = 上0.4 ~ 0.5号 (15 ~ 30cm)

下0.2 ~ 0.3号 (45 ~ 70cm)

上下のハリスの太さを変えるとカラミにくい。段差は、ヘラブナのタナが底に近い状況では狭く、ヘラブナが底に着いていない状況では広く取るのが基本である(段差は15 ~ 55cm)

スタート時は上20cm下45cm程度から始めてみてください。釣り場によって傾向があるので、事前に情報を集めましょう。

ハリ = 上4 ~ 6号 / 下2 ~ 4号
上バリは水深やバラケの大きさで使い分け、下バリはくわせの種類で使い分ける。ウドン系で2 ~ 3号、グルテン系で3 ~ 4号。

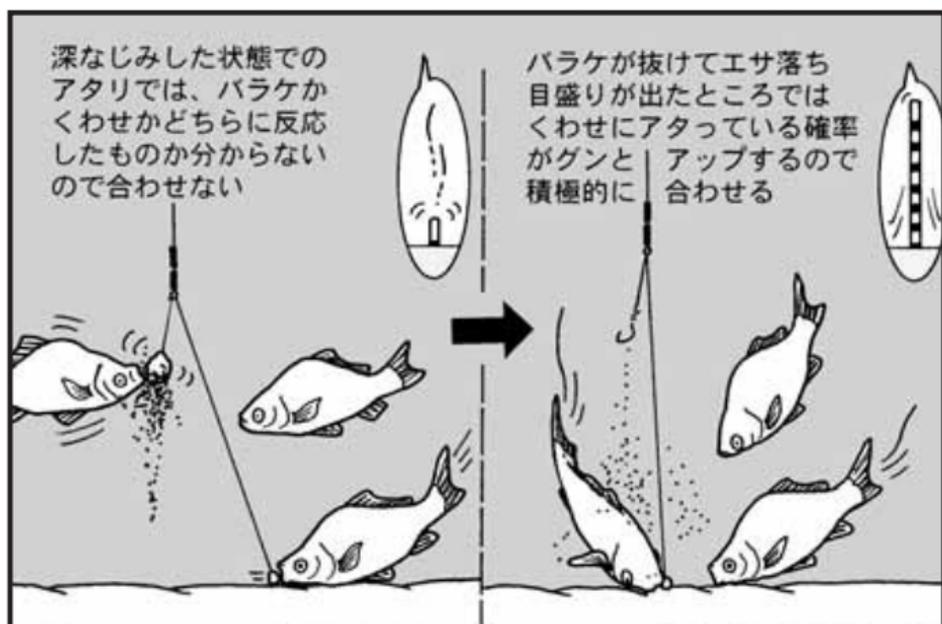
Step.2

釣り方のコツは？

感覚的には底釣りというよりも、むしろセットの深宙釣りのイメージを持った方が良さだろう。但しバラケを食ってもかまわない宙釣りに対し、段差の底釣りでは「絶対に食わせないゾ！」という確固たる信念が安定した釣況を確立するためには必要不可欠である。

そのためにはバラケを落下途中で極力バラケさせないこと、興味は示すがバラケを食いやすいタッチにしないこと、そして何よりも大切なことは、バラケが完全にハリから抜けてからのアタリを取ることである。パーフェクトな地合では、ヘラブナはバラケの位置よりも下層に集中し、落下するバラケの粒子を追って底にあるくわせに向かって行く。

このベストな状態をキープするには絶対にウワズらせないことだ。そのためにはどんなに良いアタリであっても、バラケが残っている状況では絶対に合わせないこと。仮に釣れたとしても残留エサが舞い上がり、ウワズリを助長してしまう。それならアタリ返しを期待して我慢した方が、メリットが大きいはずだ。



Step.3

どんなエサがいいの？

【バラケ】

ダンゴの底釣り夏



比重があり、まとまりの良さが特徴。段底では、タナまで持たせるために適宜ブレンド。

底バラ



比重があり、バラケ性の良さが特徴。縦方向にバラけるのでウワズリの抑制にも効果あり。

冬のバラケ



比重が軽く超微粒子のバラケエサ。ブレンドの最後の締めに使うと経時変化が少ない。

バラケマッハ



水深の浅いところや軽めのバラケに好反応を示す場合、「底バラ」に換えてブレンドの核とすると良い。調整用にも可。

セット専用バラケ



適度な比重とバラケ性の良さが特徴。段底のバラケなら、「底バラ」と組み合わせれば、縦にバラける理想的なエサができる。

段差の底釣りのバラケに求められる働きとは、目的のタナで広範囲にバラけて、より多くのヘラブナにアピールできる集魚力。ネバらず、ハリに残り過ぎないハリ切れの良さ。ウワズリを抑える比重の大きさなどである。

これらの働きを明確に打ち出すためには、重い・軽い・ネバる・バラけるなどの性質（特性）のハッキリした麩エサを、その状況にあった比率でブレンドする必要がある。

また厳寒期の活性の落ちたヘラブナには、微粒子の麩エサが効果的であることも認められている。このため、特性の明確なエサの中からできるだけ細かな粒子のエサを選択し、あまり練り込まずに素材の持つ性質を利用したエサ作りが大切である。

【くわせ】

待ち釣りのリズムになることが多い厳寒期。基本は溶けることのないウドン系の固形物である。段差の底釣りでは、くわせエサに重さが必要なので自宅で作るわらびウドン「特選わらび彩」や釣り場で簡単に作れる「感嘆」がオススメだ。また、食いが極端に渋かったり、底の状態が良くないときには、軽い「感嘆」を使うのが効果的だ。より自然に水中を落下する、軽いくわせが有効な場合もあるので覚えておこう。

反対に食いの良い状態、特に大型新ベラのコンディションが良い場合は、ウドン系よりもグルテン系のくわせの方が、アタリが出るのが早い傾向だ。とはいえエサ持ちの良さは必須条件。オススメは「わたグル」のチョイ硬め。段底には絶対自信の必勝くわせだ。

特選わらび彩



ネバリ過ぎず、コシもある。やや硬めに仕上げると、エサ持ちもさらに良くなりベター。

感嘆



感嘆よりややネバリ、重さはわらびウドンに近いので、ハリスが張りやすく明確なアタリが出る。

感嘆



水量と練り加減で硬軟が自由自在。底の状態が悪いポイント、超食い渋り時に威力を発揮。

わたグル



新ベラの食いが良い時に威力を発揮。グルテン繊維がダレず、ハリのコロで丸く膨らむ。

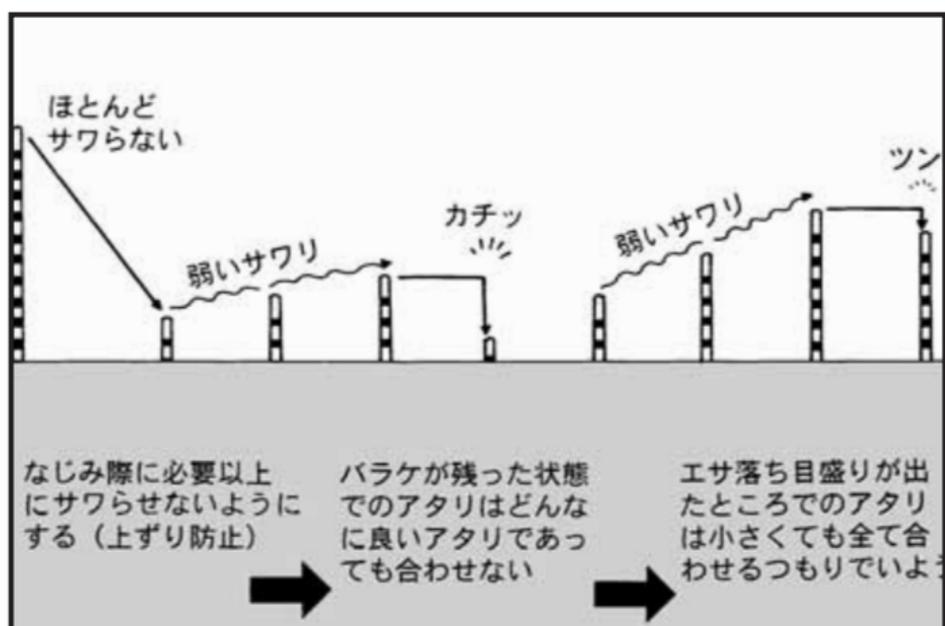
Step.4

理想的なウキの動きは？

打ち始めは深なじみが絶対的条件だが、釣れ始めてからはアタリの出方を見て、なじみ幅をコントロールするのが基本。状況によっては2～3目盛り程度と、かなり浅いなじみ幅が合うこともある。

ベストといわれるウキの動きは、ウキが立ち上がりなじみに入るまではほとんどサワらず、エサ落ち目盛りを過ぎるあたりで微かにサワる程度。完全になじみ切ったところで上下の微動が表れ、バラケが促進されるのに合わせてトップが戻り、バラケが完全に抜け切ったところで、下バリが底に着いた状態のエサ落ち目盛り（この確認を怠ることなかれ！）が出たことを確認。その後少しおいてから「ムズッ」「カチッ」と半目盛りから一目盛り程度入れれば完璧だ。

この決めアタリが出るのに長い時間が掛かることがある。厳寒期では5分以上掛かることも珍しくなく、このためなじみ切ってからサワリが認められた場合に限って、ガマン強く待ち釣りに徹することも必要だ。この時には微細なアタリにも積極的に合わせてみよう。



Step.5 エサ作り

【バラケ】

「ダンゴの底釣り夏」200cc + 水200cc +
「底バラ」200cc + 「冬バラケ」400cc



200cc

+



200cc

+



200cc

+

How to make

「ダンゴの底釣り夏」200ccに水200ccを加えてドロドロに溶く。3分以上放置してから「底バラ」200ccを加えザツとかき混ぜ、さらに「冬のバラケ」400ccを加え、ダマをほぐすようにかき混ぜ、サラッとした状態に仕上げる。



400cc



時間が経ってバラケにネバリが生じたら、手水をバラバラと打ってから「バラケマッハ」または、「冬のバラケ」をひとつかみ振り掛ける。

【くわせ】

「特選わらび彩」分包1袋 + 水140cc

「感嘆」10cc + 水15～20cc

「感嘆」10cc + 水20～25cc

「わたグル」50cc + 水60cc



分封1袋

+



140cc

「特選わらび彩」は分包1袋に対して水140ccとする他は、エサ袋の裏書き通りの手順でOK。



10cc

+



15～20cc

「感嘆」は粉10ccに水15～20cc。蓋付きの容器に水を先に入れ、粉を入れたら直ぐに蓋をしてシェイクする。



10cc

+



20～25cc

「感嘆」は状況によって水量を調節するが、厳寒期であれば粉10ccに対し水20～25ccで柔らかめに。



50cc

+



60cc

「わたグル」は50ccに対し水60ccのやや硬めが標準。食いが良い時は手水で柔らかめにするのがコツ。

打ち始めは...

上からバラケさせるといきなりウワズることがあるので深なじみでスタート。バラケ方も重要なのでトップの戻りに注視し、サワリが出るまではジワジワ、サワったらスッとすぐに戻るようにバラケを調節する。

ヘラが寄ったら...

深なじみしている時にツンツンとアタらせないようにするのがコツ。サワリと連動してバラケが抜け、必ずエサ落ち目盛りが出てからの、小さくても鋭いアタリに的を絞る。慌ててスレさせないことが重要だ。

当たらない時は...

サワリがあってアタらない場合は、待ちが足りないか、タナが合っていない証拠。まずはサソイを入れながら、じっくり待つことが肝心。待つとサワリもなくなってしまうようならバラケの位置が上過ぎる（底から離れ過ぎ）と判断。段差を詰めるなどの対処をする。

カラツン対策は...

深なじみ時のカラツンはバラケへのアタリ。絶対に合わせず見送る我慢が必要だ。エサ落ち目盛り付近でのカラツンはタナに原因がある場合が多い。この時は1～2cmズラシ気味にして様子を見る。

ウワズってきたら...

夏場のように、明確な上ずりサインが表れにくいので、なじみ際のサワリが増えたり、なじみ幅が少なくなってきたら要注意。バラケを抑えたり、小さくしてヘラブナを落ち着かせる。

アタらない時のイメージ

この状態ではバラケが底から離れすぎているためサワリは出るがくわせに興味を示さない。バラケが底に近づき過ぎてもNGである

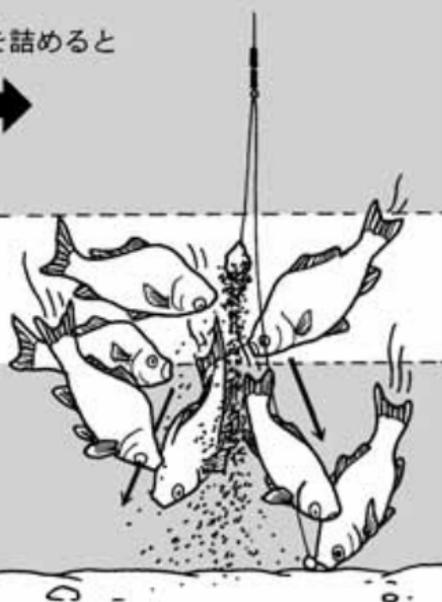
段差を詰めると



ヘラの濃いエリア



ヘラの濃いエリアにバラケを位置させることでヘラは次第に下を向いてくわせに興味を示すようになる

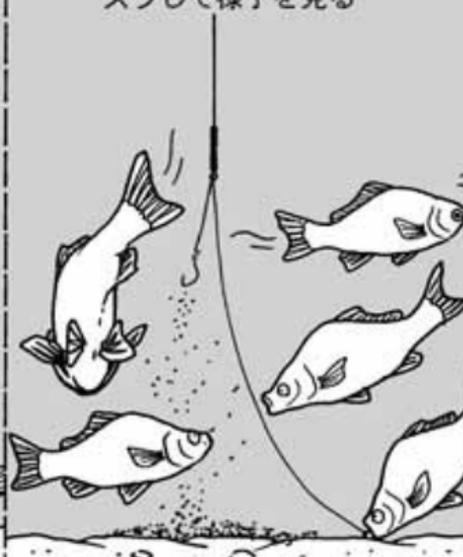


カラツンのイメージ

深なじみの状態でのアタリはその大半がバラケへの反応の場合が多い。また糸ズレの可能性も大きい



くわせだけになってのカラツンはタナが合っていないことを考える。まずは2cm程度多めにズラして様子を見る



最新爆釣テク

活性のない時、超食い渋りに効く段底！

食い気があるヘラブナであっても、バラける麩エサの粒子ばかり吸いあおらせていては、肝心のくわせエサにまで興味を引かせることはできない。こうしたことは、渋い釣況では致命的にすらなりえる。最先端の段底では放流量の少ない釣り場や活性がない時でも、確実に釣果を上げる釣法が生みだされた。

それがややバラけやすい小エサをバラケに使った段底である。バラケ以外は通常の段底と同様だが、それだけにバラケの作り方・調整方法には神経を使う。一例を下記に示すが、ヘラブナがサワったら即ハリから抜け落ちる大きさとタッチが重要で、最大のキモにもなる。

バラけた直後のウキの戻りに連動して、くわせのエサが動くチャンスが増えることでアタリの出る確率もアップ。しかも、ウキが動いたかな程度のアタリでも食っていることが多い。感覚的にはバラケの下に寄ってきたヘラブナは、すべて釣り切るくらいのつもりでテンポ良く打ち返し、じっくりとアタリを待ちたい。

「へらスイミー」200cc + 水200cc +

「底バラ」200cc + 「セット専用バラケ」400cc



200cc

+



200cc

+



200cc

+

How to make

「へらスイミー」200ccに水200ccを加えてドロドロに溶く。3分以上放置してから「底バラ」200ccを加え、ザツとかき混ぜてから「セット専用バラケ」400ccを加えて、ダマをほぐすように混ぜれば出来上がり。使い始めはややしっかり目にエサ付けし、エサの残量となじみ幅をあらかじめ確認しておくことが大切である。



400cc

